

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520567

研究課題名(和文) 明治後期の学術用語の伝播・浸透と現代日本語への影響に関する研究

研究課題名(英文) A study on the transference and the adaptation of scholarly terms to Japanese at the beginning of the 20th century and their influence to the present Japanese

研究代表者

真田 治子 (SANADA, Haruko)

立正大学・経済学部・教授

研究者番号：90406611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：明治維新前後には「客観」「法律」など数多くの新しい概念を表わす語が生じ、それらは日本の近代化を支えたと考えられる。本研究ではこれらの学術用語の明治期から現代までの消長について調査を行った。明治期の学術用語集『哲学字彙』と様々な資料との照合から、その三版は「哲学字彙稿本」を元に編集されたこと、『哲学字彙』の語彙は間接的に、20世紀初頭、上海で宣教師が編集・出版した学術用語集に移植されたこと、『哲学字彙』編者が執筆した教科書や専門書が、学術用語の現代日本語に影響を与えた可能性があること、などが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Equivalent terms representing European concepts, e.g. "object" or "law", etc. supported the building of a modern society in Japan in the late 19th century. In this study we investigate and analyze changes of scholarly terms from the late 19th century up to the present, and how they took root and became popularized, or failed to become established and disappeared. By means of comparisons between a list of scholarly terms in the 19th century titled Tetsugaku Jii (Dictionary of Philosophy) and various materials, we conclude that (1) the third edition of Tetsugaku Jii was compiled based on the "manuscript of Tetsugaku Jii", that (2) headwords and their equivalents of Tetsugaku Jii were indirectly transferred and adapted to a list of scholarly terms compiled and published by missionaries in Shanghai at the beginning of the 20th century, and that (3) there is a strong possibility textbooks and technical books which editors of Tetsugaku Jii had written gave an influence to the present Japanese.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語学 計量言語学 語彙論 辞書論 哲学字彙 近代語研究 井上哲次郎 学術用語

1. 研究開始当初の背景

(1) 幕末・明治初期に導入された新しい語彙のその後の消長

研究代表者は、幕末・明治初期に西欧との文化接触や文明開化の影響によって新たに生まれた語の、その後の現代までの消長を研究している。明治維新前後には「客観」「法律」など数多くの新しい概念を表わす語が生じ、その結果、日本語の語彙はその基本的な部分にまで大きな変動がもたらされた。これらの語は西欧の文物受容における日本の近代化を支えただけでなく、この150年の間に現代日本語の基本的な語彙の一部に浸透し、専門分野のみならず一般的な言語生活においても必要不可欠な語彙となっている。幕末・明治初期から現代にかけて、これらの新しい概念を表わす語や学術関係の用語が一般社会に広まっていく様相を雑誌・新聞・小説・外国語辞書などで語の使用を通してみていくことで、近・現代の日本語基本語彙の形成過程を明らかにするという研究である。また研究代表者の研究は、明治初期から現代までの語彙の交替や変化を個々の語の記述的研究によってだけでなく、語彙変化の全体像を主に計量言語学の理論や手法によって明らかにするところに特色がある。

(2) 学術用語集『哲学字彙』に関する研究の状況

先行研究(真田 2002)では、明治14(1881)年に出版された人文・社会・科学分野の総合学術用語集『哲学字彙』初版に含まれる「法律」「物理学」などの漢語を、多くの訳語を生み出した西周の語彙との比較や、幕末から現代にかけての各種の辞書との比較することでその性格を分析した。西周の新語の多くもこの『哲学字彙』に受け継がれ一般化したと考えられており、明治から現代日本語の形成に至る道筋の重要な資料と考えられる。

『哲学字彙』はこれまで明治初期から大正まで初版・改訂増補版・英独仏和版の3つの版が知られていたが、改訂増補版と英独仏和版の間には28年の空白期間があり、その理由はわかっていなかった。近年の研究代表者の研究で、この28年の間に改訂増補版の再版が存在したこと、英独仏和版の下敷きとなった「稿本」が発見されたこと、英独仏和版の著者の一人である心理学者元良勇次郎が英独仏和版編集の際、検討に使用したと思われる自筆書き入れ本が発見されたことなど、いくつかの新しい知見が得られた。

2. 研究の目的

本研究で主な研究資料とした『哲学字彙』は幕末・明治期の学術用語の集大成であるが、ここに採録された語彙は現代日本語の中核の一部をなしていることがわかっている(真田 2010)。しかしながら、どこからこれらの語が集められたのか、またどのようにしてこれらの学術用語が現代日本語に深く浸透す

るに至ったのか、という道筋は明らかではない。本研究では『哲学字彙』の前後で出版された辞書や専門書などとの照合を行うことで、その消長の経路の一端を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 『哲学字彙』よりも前に出版された哲学辞典との照合

『哲学字彙』初版はフレミング編『哲学辞典』の見出し語を参考にしたとされているが、実際には三分の一しか一致していない。そこでフレミングの辞典と合わせて、フレミングの辞典に増補をした Krauth 版とも見出し語の照合を行った。

(2) 『哲学字彙』再版刊行後の三版の成立過程に関する調査

当時刊行されていた『哲学雑誌』には「哲学字彙」稿本という付録が連載されていた。そこでこの付録を収集し、『哲学字彙』再版及び三版と照合を行った。また主たる編者の井上哲次郎が残した日記から当時の編集作業に関わる事項を抽出した。

(3) 『哲学字彙』の影響を間接的に受けたと推定される、宣教師が編纂した中国の学術用語集の調査

20世紀初めに上海で活動した宣教師によって編集された Dictionary of Philosophical terms (Richard & MacGillivray 1913)はその前書きで、日本の『哲学大辞書』を参照したことが書かれている。『哲学大辞書』の項目は『哲学字彙』編者とその同僚や弟子によって執筆されているため、影響関係が確認できる。そこで、『哲学大辞書』の見出し語と Dictionary of Philosophical terms の見出し語の照合を行い、どのような語が受け継がれたかについて調査を行った。

4. 研究成果

(1) 『哲学字彙』よりも前に出版された哲学辞典との照合

『哲学字彙』見出し語はフレミングの辞典と約31%、さらにフレミングの辞典に増補をした Krauth 版と約19%の見出し語が一致した(真田 2011)。残りの半数の見出し語については他の辞書からの引用の可能性を探ることになった。

(2) 『哲学字彙』再版刊行後の三版の成立過程に関する調査

見出し語・訳語の照合から『哲学雑誌』付録の「哲学字彙」稿本は三版の一部となったことが明らかになった。井上哲次郎の日記の分析からは、編者らが毎週水曜日に「哲学字彙の会」と称する辞書編集のための会議を開いて検討を行っていたこと、稿本を三版の最初の入稿原稿として一括で出版社に引き渡していたこと、三版が『哲学雑誌』300号の

記念出版物として刊行され、大々的に関係者に広告されたことが明らかになった(真田2012a)。

(3) 『哲学字彙』の影響を間接的に受けたと推定される、宣教師が編纂した中国の学術用語集の調査

調査の結果、Dictionary of Philosophical Terms は『哲学大辞書』の巻末に付されていた用語英和索引を参照したと推定された。

『哲学大辞書』のA～Dまでのうち、約65%の見出し語を転用しており、そのうち92%の訳語も一緒に転用していた。Dictionary of Philosophical terms に採用されなかった訳語には、平仮名・片仮名が使用されていたり、漢語ではなく句の形式になっていたものがあり、編者の宣教師が、そのままでは中国語の訳語に持ち込むことが難しいと判断した語を除外したのではないかと推定された(真田2013a)。

(4)その他

本研究の中心的な調査・分析と合わせて、周辺の資料や分析手法を調査している過程で、以下の点が明らかになった。

教科書・専門書と『哲学字彙』との関係

『哲学字彙』の編者が執筆した中学教科書や専門書には『哲学字彙』の訳語を用いているケースが見られた(真田2015a)。また『哲学字彙』の編者が学生時代の勉学で使用した洋書教科書に『哲学字彙』の見出し語との関連が推定されるケースがあった(真田2015b)。これらはまだ限られた範囲での知見なので、今後、調査対象とする資料を精査し、明治期の学術用語が現代日本語の中核への浸透を果たした経路の一つとして研究を行う。

語彙の計量的分析と文法的要素の影響

従来、日本語学では語彙論と文法論は別の分野として研究され、両者の関係性についてはあまり検討されて来なかった。語彙量の調査や統計的分析では、各々の語彙の多少が検討されるにとどまっていたが、語の中には特定の語と結びつきやすいもの・結びつきにくいものがあり、それらも語彙量に影響を与えていることがわかってきた(真田2012b, 2013b)。たとえば「会う」という語の使用度数はいくつであるかということは、同時に「どこで」「いつ」ということを示す名詞、副詞、助詞などの頻度にも影響を与える。さらに文中での出現位置も頻度に影響を与えることがわかった。従って語彙量の分析の際には、個々の語の頻度を調べるだけでなく、その語が含まれる文を構成する要素と文の構造も合わせて調査すべきと考え、結合価理論の語彙論への導入を試みた。学術用語の現代日本語への浸透という問題についても、用語がどのような文脈で使用され、どのような語の頻度に影響を与えているかを検討する必要があるが、このような語彙論と文法論に

またがる研究は、まだ手法が確立されておらず、今後はまず手法そのものを研究対象として検討する。

<引用文献>

Richard, T., MacGillivray, D. (eds). (1913). Dictionary of Philosophical Terms: Chiefly from the Japanese. Shanghai: Christian Literature Society for China.

真田治子(2002)『近代日本語における学術用語の成立と定着』東京：絢文社。

真田治子(2010)「現代日本語に浸透した学術用語」『日本語学』29巻15号、東京：明治書院、pp. 26-34.

真田治子(2011)「学術用語の受容と伝播『哲学字彙』の前の辞書・後の辞書」近代語学会2011年度第2回研究発表会、於白百合女子大学。

真田治子(2012a)「『哲学字彙』稿本と『英独仏和哲学字彙』の成立」近代語学会編『近代語研究』第16集、pp.49-62。東京：武蔵野書院。

真田治子(2012b)。「助詞の使用度数と結合価に関する計量的分析方法の検討」『経済学季報』62-2号、pp. 1-35.

真田治子(2013a)「中国へ伝播した二十世紀初頭の日本の哲学用語『哲学大辞書』と中国の宣教師が編纂した術語集の比較」近代語学会編『近代語研究』第17集、pp. 155-168。東京：武蔵野書院。

真田治子(2013b)。「主格を示す助詞の頻度分布と主格省略の問題 結合価理論を参考にした計量的分析」『学芸国語国文学』45号、pp. 1-14.

真田治子(2015a)「明治中期・後期の旧制中学教科書における学術用語『哲学字彙』編者が執筆した専門書と教科書」近代語学会編『近代語研究』第18集、pp. 129-143。東京：武蔵野書院。

真田治子(2015b)「明治初期の洋書教科書と『哲学字彙』の術語 Jevons の術語との比較」中山緑朗編『日本語史の研究と資料』、pp. 396-406。東京：明治書院。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計4件)

Haruko Sanada, Book review on "Ji, M. Quantitative Exploration of Historical Translations: A Corpus Study of Tetsugaku Jii". Glottotheory (De Gruyter)、査読有、vol. 5(2)、2013、pp. 305-306.
DOI:10.1515/glot-2014-0020.

真田治子、主格を示す助詞の頻度分布と主格省略の問題 結合価理論を参考にした計量的分析、学芸国語国文学(東京学芸大学国語国文学会)、査読無、45号、2013、pp. 1-14.

真田治子、書評・今野真二著『漢語辞書論攷』、日本語の研究(日本語学会)、査読有、第9巻第3号、2013、pp. 84-89.
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009687877>

真田治子、助詞の使用度数と結合価に関する計量的分析方法の検討、経済学季報(立正大学経済学会)、査読無、62-2号、2012、pp. 1-35.
<http://hdl.handle.net/11266/5397>

[学会発表](計15件)

真田治子、自然な長さの文とは何か? 動詞結合価と文構造と頻度の関係、立正大学経済研究所研究会、2016年2月23日、於立正大学(東京都・品川区).

真田治子、明治初期洋書教科書の副読本としての『哲学字彙』 東京大学洋書教科書及びフェノロサ講義受講ノートとの比較、第321回日本近代語研究会、2015年2月28日、於二松学舎大学(東京都・千代田区).

真田治子、文法的要素と構造が語の頻度を与える影響について Menzerath-Altmannの法則と結合価との関係に関する調査、国立国語研究所コーパス日本語学の創成(語彙・文法・文体・表記)プロジェクト共同研究発表会、2014年12月13日、於国立国語研究所(東京都・立川市).

Haruko Sanada、A co-occurrence and an order of valency in Japanese sentences、Qualico2014 International Quantitative Linguistics Conference(国際計量言語学会大会)、2014年5月30日、於 Palacky University (Olomouc (Czech Republic)).

真田治子、明治期の学術用語が一般化するまで(招待講演)、日本語学会 2014 年度春季大会 70 周年記念シンポジウム「学術日本語」の歴史と未来 大学教育国際化時代を迎えて、2014年5月17日、於早稲田大学(東京都・新宿区).

Haruko Sanada、Japanese philosopher INOUE Tetsujiro's view of multi-lingualism: A reference to his diary and notebooks written during his study in Europe 1884-1890(招待講演)、Ogai-Vortrag(鷗外講演会)、2013年10月31日、於ベルリンフンボルト大学日本文化研究センター 附属森鷗外記念館(Berlin (Germany)).

Haruko Sanada、Transference and

adaptation of the terms from Japan to China at the beginning of the 20th century、The 19th International Congress of Linguists(第19回世界言語学会議)、2013年7月22日、於 Geneva University (Geneva (Switzerland)).

真田治子、計量国語学に望むもの(招待講演)、計量国語学会第56回大会シンポジウム、2012年9月29日、於名古屋大学(愛知県・名古屋市).

真田治子、助詞の使用度数に関する計量的分析方法の検討、国立国語研究所コーパス日本語学の創成(語彙・文法・文体・表記)プロジェクト共同研究発表会、2012年6月30日、於国立国語研究所(東京都・立川市).

Haruko Sanada、Language Life and Gender in Japanese(招待講演)、Guest Lecture at the Institute for Institute for English and American Studies、2012年5月2日、於 Rostock University (Rostock (Germany)).

Haruko Sanada、Thematic Concentration in Japanese Prose、Qualico2012 International Quantitative Linguistics Conference(国際計量言語学会大会)、2012年4月28日、於 Belgrade University (Belgrade (Serbia)).

Haruko Sanada、Employment of Japanese terms for Chinese dictionary by CLSC (Christian Literature Society for China)、The 7th International Conference on Missionary Linguistics(第7回宣教と言語学国際大会)、2012年3月1日、於 Bremen University (Bremen (Germany)).

真田治子、学術用語の受容と伝播 『哲学字彙』の前の辞書・後の辞書、近代語学会 2011 年度第2回研究発表会、2011年11月26日、於白百合女子大学(東京都・調布市).

Haruko Sanada、Adaptation of philosophical terms from Japan to China、第7回アジア辞書学会(AsiaLex2011)、2011年8月22日、於京都テルサ(京都府・京都市).

Haruko Sanada、Quantitative Analysis of Japanese Vocabulary using h-index(招待講演)、Guest Lecture at the Institute for Institute for English and American Studies、2011年7月14日、於 Paderborn University (Paderborn (Germany)).

[図書](計11件)

Haruko Sanada 他、Walter de Gruyter、Recent Contributions to Quantitative Linguistics、2015、pp.139-152.

真田治子他、武蔵野書院、近代語研究第18集、2015、pp.129-143.

真田治子他、明治書院、日本語史の研究と資料、2015、pp.(39)406-(49)396.

Haruko Sanada 他、RAM-Verlag、Empirical Approaches to Text and Language Analysis、2014、pp. 190-206.

真田治子他、朝倉書店、日本語大事典、2014、pp. 1497-1497.

Haruko Sanada 他、RAM-Verlag、Issues in Quantitative Linguistics 3 (Studies in Quantitative Linguistics, vol.13)、2013、pp. 224-281.

Haruko Sanada 他、Akademiska Misao、Methods and Applications of Quantitative Linguistics、2013、pp. 130-140.

真田治子他、武蔵野書院、近代語研究第17集、2013、pp. 155-168.

真田治子他、明治書院、質問調査法と統計処理、2012、pp. 107-156.

Haruko Sanada 他、Praesens Verlag、Synergetic Linguistics: Text and Language as Dynamic Systems、2012、pp. 197-208.

真田治子他、武蔵野書院、近代語研究第16集、2012、pp. 49-62.

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

真田治子、学会参加報告 QUALICO2014 (国際計量言語学会大会)、計量国語学、29 巻 6号、2014、pp. 228-231.

Haruko Sanada、Obituary of Professor Shizuo Muzutani: founder of the Japanese quantitative linguistics、IQLA Newsletter、vol.5, no.2-3、2014、pp.2-3.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

真田治子 (SANADA, Haruko)

立正大学・経済学部・教授

研究者番号：90406611

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし